

(私案) 本校に求めるモノとは ～現状と課題, 未来へ向けた一考察～

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校 保健体育科 若山 和佳子

1 はじめに

本校に赴任して5年目が経過しようとしている。校務の一端として5年間携わってきた部活動について、“玉龍高校のミッションとしての部活動”という視点から、現状と課題を踏まえて今後の方向性を発信できればと考え本研究のテーマとした。社会的背景としてある少子化や私立高校指向の増加に対応するため、本校の部活動はどうあるべきかを明確にする時期にきていると考える。学校の活性化に寄与するという視点と、今後持続可能なものにするという視点をもって、本校の現状と課題、そして未来を考え、個人的意見をまとめていきたい。

2 本校の状況

本校は、鹿児島商業高校、鹿児島女子高校と並ぶ鹿児島市立の高等学校で、県内にある市立高校の中では唯一の普通科高校である。文武両道、行学一体の伝統を継承する創立81周年の学校で、平成14年度から15年度にかけて鹿児島市立の3高等学校の活性化について検討する中で、平成16年2月に併設型の中高一貫教育の導入が決定し、平成18年から中高一貫教育校となった。(詳しい経緯等については、鹿児島市立学習情報センター鹿児島市の中高一貫教育の概要を参照)。導入に伴い、1学年240人(6学級)のうち、玉龍中学校から入学する生徒が約120人、他の中学校から受験して入学する生徒が約120人となる。今、中高一貫教育が始まって16年、平成23年度に今の6か年の一貫教育の体制が整ってから10年にさしかかる時期で、まさに過渡期を迎えようとしている。中学校入試については、学力検査ではなく、適性検査を実施している。高校入試については、公立高校の推薦入試と学力検査を実施している。中学・高校の受験倍率については表1に示したとおりで、公立高校の中では比較的やや高い水準を保っている。生徒の8割以上が国公立大学志望で、これまで東大・京大・大阪大等いわゆる難関校といわれる大学にも合格するなど進路実績もあり、文武両道を目指す生徒達が入学してくる。

表1 入試倍率

玉龍高校 (募集定員120)		玉龍中学校 (募集定員120)	
平成28年度	1.18倍	平成25年度	5.81倍
平成29年度	1.43倍	平成26年度	5.61倍
平成30年度	1.23倍	平成27年度～	非公開
令和元年度	1.46倍	～令和元年度	
令和2年度	1.40倍	令和2年度	4.04倍
令和3年度	1.22倍	令和3年度	3.79倍

鹿児島市教育委員会HPより引用
鹿児島市教育委員会定例会議録より引用

玉龍中学校設立当初平成18年度 *11.16倍
*鹿児島市立学習情報センター鹿児島市の中高一貫教育の概要より引用

参考) 令和3年度公立高校倍率 0.81倍

(県立 0.81倍 市立 0.80倍)

平成29・30年度は鹿児島大学附属中学校入試日と重なる

3年 3月卒		H29	H30	H31	R2	R3
国立大学	現	75	81	75	83	79
	過	22	18	11	18	11
公立大学	現	20	26	22	22	15
	過	3	2	2	3	4
国公立大学計	現	95	107	97	105	94
	過	25	20	13	21	15
計		120	127	110	126	109

(上の表は学校ハソフット H28～R3・創立記念新聞より抜粋)

東京大・京都大・大阪大・東京藝術大
東京工業大・名古屋大・神戸大・筑波大・九州工業大
九州大・広島大・鹿大(医学部医学科)・横浜国立大
東京農工大・お茶の水大・早稲田大・慶応大・上智大
青山学院大・明治大・法政大・中央大・同志社大
立教大・駒沢大 など

3 本校の部活動について

表2 玉龍高校設置部

運動部 19																			文化部 14														同好会 1
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
野球	男バスケットボール	女バスケットボール	男バレーボール	女バレーボール	男バドミントン	女バドミントン	サッカークー	男テニス	女テニス	卓球	男ソフトテニス	女ソフトテニス	剣道	ラグビー	陸上	弓道	応援団	水泳	サイエンス天文班	サイエンス生物班	合唱	書道	美術	家庭	JRC	吹奏楽	百人一首	放送	華道	茶道	写真	演劇	将棋同好会
○		○	○	○									○	○	○		○	○			○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	

○は玉龍中学校も設置している部活動（野球は軟式野球）

令和3年4月現在、運動部19、文化部14、同好会1、計34の部活動（上表2）が設置されている。平成29年に空手部と、平成30年に柔道部が部員不足により廃部となった。一方平成30年に将棋同好会が発足した。創立当初からこれまでに、野球部春夏甲子園出場7回、ラグビー部花園出場7回、男子バレーボール部インターハイ出場8回、春高出場2回と公立の普通科高校では最多を誇る実績をもつ。放送部は毎年のようにNHK杯全国高校放送コンテストに出場し、その他の部活動においても国体やインターハイ、総文祭含め全国大会・九州大会に数多く個人出場しており、運動部・文化部ともに輝かしい活動実績がある。昭和60年～平成3年30学級あった頃を境に、過大規模解消策として行った学級数減に少子化の影響も重なり現在の18学級に至るまでの間には、徐々に上位大会への出場に変化が見られる。運動部については、団体種目よりも個人種目の出場、そして文化部の個人出場の割合が多くなっている。玉龍中学校1期生が入学した平成21年からは運動部と文化部の上位大会の出場割合が逆転している。近年では令和元年度にラグビー部が12年ぶりに県高校総体で優勝し、花園予選で準優勝するなど華々しい活躍を見せた。全国セブンズ大会にも平成13年と平成30年に2回出場している。



令和元年度「第72回鹿児島県高等学校ラグビーフットボール大会」優勝
創立80周年記念新聞掲載写真
南日本新聞・2019.6.8/11.4
2019.6.8 南日本新聞

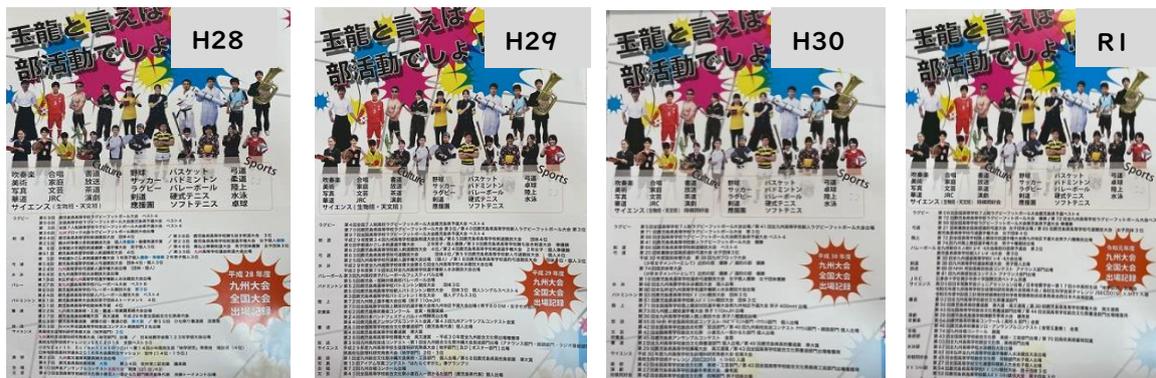


令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、多くの県大会、上位大会が中止となる不測の事態となった。史上初の県高校総体・県コンクール等の中止に、部活動生の集大成を發揮する場を失った3年生たちは涙した。かける言葉が見つからなかった。無念だった。しかし、制限がある中で、7月野球部が19年ぶりに夏の甲子園県予選大会でベスト4に入り、コロナ禍のどんよりした重たい空気を一気に明るく変えてくれた。学校に再び活気が戻った嬉しい出来事であった。



南日本新聞記事
2020.7.26
鹿屋中央高校に
7-6で競り勝ち
準決勝進出を決めた!!

学校パンフレットは全国大会・九州大会出場・県大会ベスト4以上を掲載している。次のとおりH28～R1には掲載される部活動数・成績も多くなってきた。(R2はコトで大会数減)



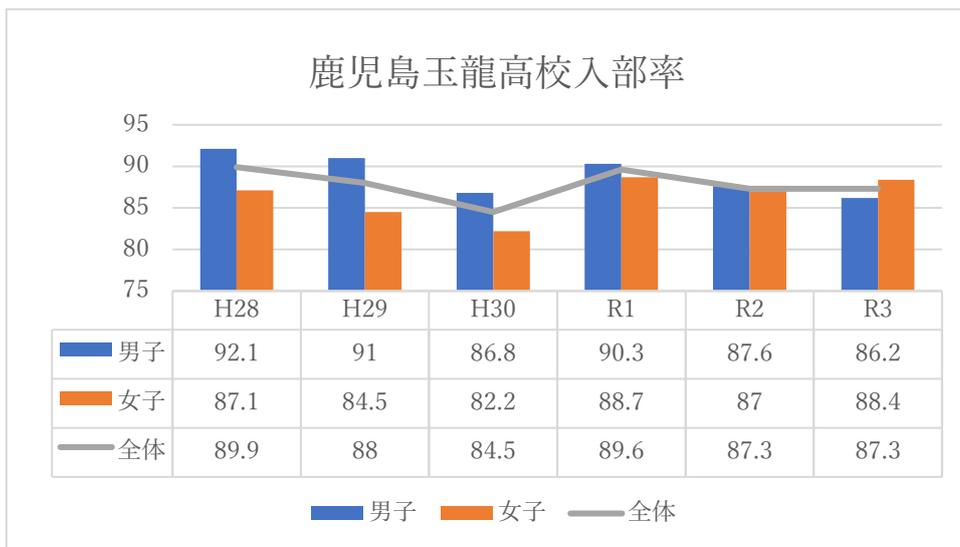
**H28～R1 全国大会出場 7人制ラグビー・放送・美術・書道・百人一首・将棋同好会・弓道女子団体
国体選抜メンバーとして出場 弓道・剣道・ラグビー・男子バレーボール
九州大会出場 ラグビー・男子バレーボール・男子バドミントン・剣道・弓道・水泳・陸上・合唱・吹奏楽・サイエンス**

環境面については、市立である本校は他の公立普通科高校より恵まれた環境にある。活動場所として、野球専用グラウンド、屋内プール、屋内2階建て弓道場、専用テニスコート、全天候型短距離及び跳躍用トラック、芸術棟、吹奏楽部練習室、ラグビーはグラウンド占有スペースがある。更には合宿で利用できる宿泊施設としてセミナーハウス「育龍館」も隣接しており、他校との練習試合に大いに活用できる。又、各部顧問以外に、部活動指導のための非常勤講師が6名、外部指導登録指導者が2名配置されている。活動費の面でも、生徒会部費や九州大会以上に出場する際の派遣費等々、体育文化振興費や同窓会、鹿児島市からも活動をサポートしていただいている。部活動生の下校時刻は、1年間を通して19時15分(上のグラウンドの下校時刻は19時30分)で、大会前は30分の活動延長が認められる。市内の普通科高校と比較すると活動時間が確保されている。

3 部活動の入部率について

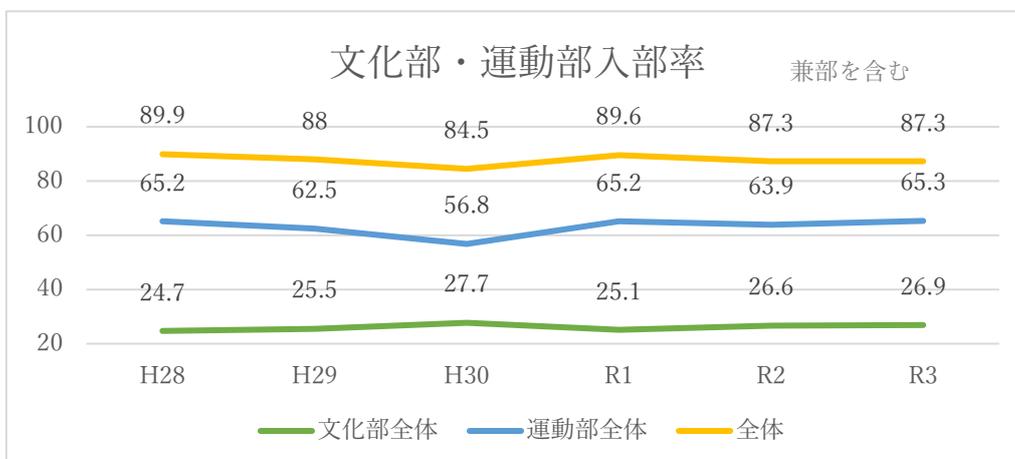
(1) H28 からの 6 年間の部活動入部率

本校は平均して約 88%の生徒が部活動に入部している。推移をみると、H30 に男女とも入部率がやや減少して全体で 85%を下回ったが、翌年の R1 には約 90%近くまで回復した。男女別に見ると、男子の入部率の低下が見られている。一方女子の入部率はやや増加し、R3 年は、女子の入部率が初めて男子の入部率を上回った。



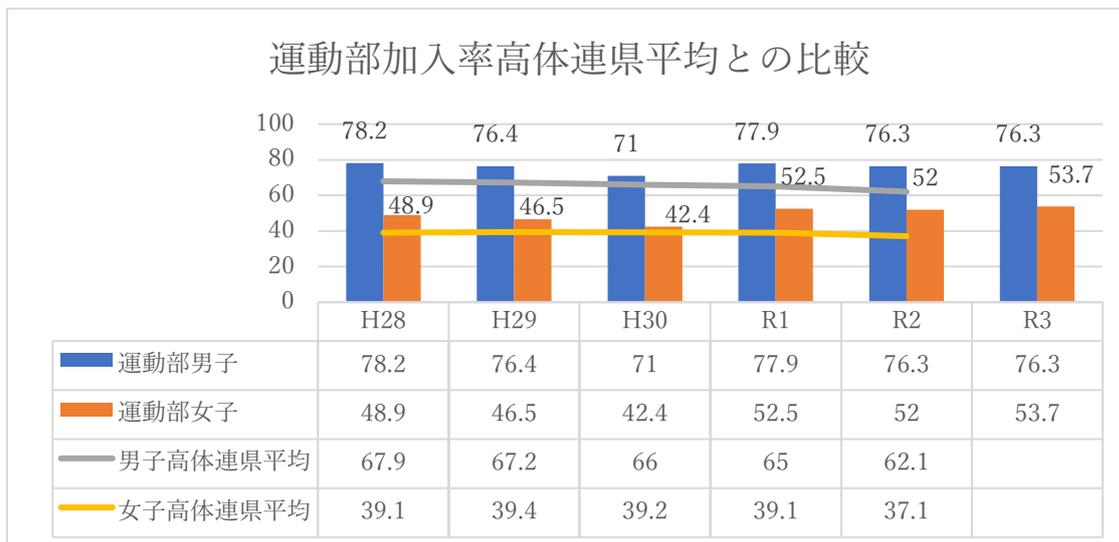
(2) 文化部と運動部の入部率

部活動生全体の内訳は、文化部が約 25%，運動部が約 65%である。H30 は運動部が減少傾向、文化部が増加した。H28・H29 は生徒数を見ると男子が女子よりも多かったが、H30 は男女比がほぼ同数になった。女子生徒数が増えてきた影響もあると考えられる。



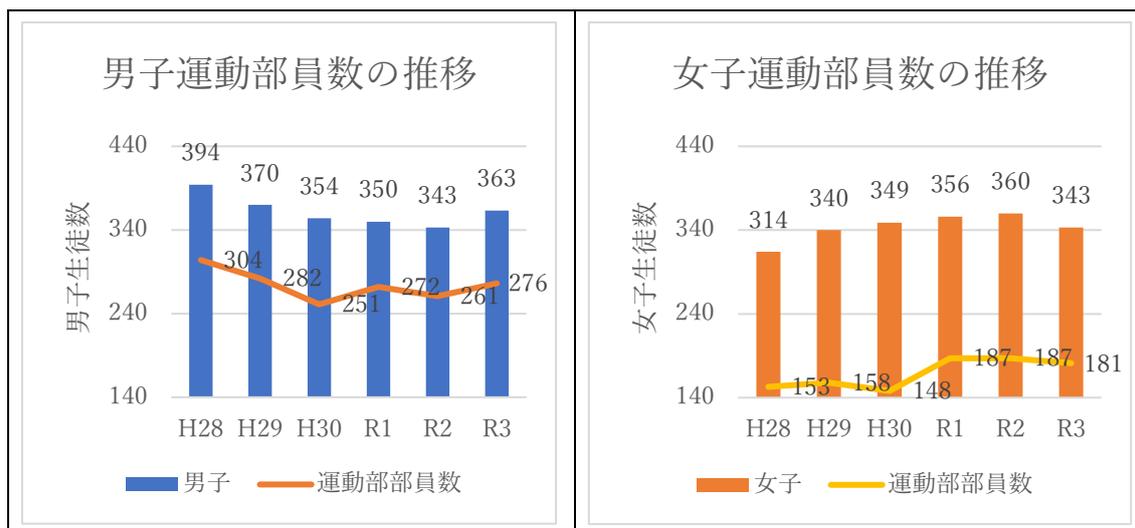
(3) 運動部の入部率

本校の運動部の入部率は、高体連県平均と比較して男女とも10%~15%ほど高くなっている。男子の運動部入部率は平均して75%程度を推移している。女子の運動部入部率はH30に42.4%まで落ち込んだが、R3には53.7%と10ポイントも上昇した。



(4) 運動部員数の推移

生徒数はH29まではやや男子が多かったがH29・H30はほぼ同数であった。R1から女子の生徒数が増え、R3にはまた男子の生徒数が逆転した。男子の運動部員数は生徒数の推移と似た傾向であった。女子の運動部員数が増加傾向を示した。応援団部等部員数が増えている。



玉龍中学校から継続して同じ部活動に入部する生徒と、中学校に設置していない部活に新しく入部する生徒が割合的にはほぼ半々である。一般的に人気種目といわれるサッカーやバスケットボール、テニス、応援団等、新種目に挑戦したいという生徒も比較的多い。

4 部活動の中高連携

中学3年生の第2学期以降も通常の部活動を継続できるという中高一貫教育校のメリットを生かし、文武両道の校風を推進することを目的に、高校の部活動に参加できるシステムを構築している。同時に「昇龍塾」という学力面のサポート講座を実施しているため、部活動への参加については、若干の制限があるという実態もある（昇龍塾の優先順位が高い）。このシステムの活用については、今一度、中高で意思統一が必要であり、より効果的な運用について議論する余地があると考え。中学校側の意見と高校側の意見があり、立場が違えばそれぞれ一理あり、それはまた一長一短であるように思う。私が思う課題は、①中学部活動の継続（6年間というスパンで育てるという視点）、②中高指導者の連携、③魅力ある部活動（部活動に求めるモノ）の3つである。

①については、あくまでも、中学生の意思・主体性を尊重するのが基本スタンスであるため強制はできないものの、やはり同一の種目を6年間、高校受験期に途切れることなく継続して続けることが可能ならば、競技力向上の面からもそのメリットは大きいと考える。特に、運動部の団体種目やダブルスのペアなどでは、1年生からレギュラーで活躍できる選手がいればチームづくりも早く仕上がり、実践練習に多くの時間を割くことも可能になる。更に中学生が部活動に参加することで高校生もまた刺激を受けて、新チームを意識した行動が促されるという効果もある。中学生にとっても、体力維持に繋がると同時に高校部活動に早く慣れることで、高校入学後の生活イメージを持つことができるため、体力面・心理的のアドバンテージを得ることができる。相乗効果が期待できるメリットは大きい。中学校ラグビー部の存在も中高連携の大きな特徴のひとつである。

②については、現在、練習の中で対戦相手をしたり、同じ場所で常に一緒に活動をしたりするなど、情報交換やアドバイスなど相互に行っている部活動もある一方、指導者間で活動において繋がりが無い部活動もある。今後中高連携という視点で、指導者同士がどのような関わり方をしていくかは、①にも影響する課題である。また、中3のこの時期においては、玉龍中学校に設置していない部活動については、専門的に指導できる中学校教諭の活用等も考えられる。

③については、研究の本テーマの核となる部分であり、中高連携に限らず、今後の生徒募集や部活動の存続にまで大きく関わってくる課題である。本校は、同じ市立高校である鹿児島商業高校や鹿児島女子高校のような強化指定部をもたない。しかし、これまで受け継がれてきた伝統の中でやはり結果を常に求められる部活動が存在する。期待に応える使命感・覚悟をもって顧問は指導にあたり、そして部員達も本気で上位大会を目指して活動している。良い成績・結果を出せば、生徒募集に反映されることが期待できる。逆に結果を出すためには人材確保が欠かせない。公立普通科高校で、大学進学への進路実現を叶えると同時に、甲子園、花園、インターハイ、春高などの全国大会を本気で狙う鹿児島玉龍高校の実現を目指していく。それが実現出来るためのシステムづくりに必要なタスクを多面的に考えてみたい。

5 部活動を取り巻く状況

現在、学校の部活動をめぐって様々な課題が指摘され、同時に働き方改革もあって、平成30年3月スポーツ庁『運動部活動のあり方に関する総合的なガイドライン』が策定された。これをうけて、鹿児島市教育委員会が策定した「学校の部活動等の方針」に基づき、本校も部活動に関する活動方針を作成して活動を行っている。今後部活動は、将来的には地域に移行していくような方向性を示している。その第一歩として、令和5年度以降、中学校から休日の部活動を段階的に地域移行することを目指すという。部活動の主体が学校単位から地域単位へと完全に移行されるまでは、平日に行われる「学校部活動」と休日に地域で担われる「地域部活動」とで区別して考えることになる。令和5年度の段階で教育委員会において兼職兼業の許可の仕組みを適切に運用できるよう、兼職兼業の考え方や労働時間管理、割増賃金の支払い等の詳細が示されることになった。実際には、受け皿としての部活動指導員の確保や環境の整備といった「地域部活動」の課題がクリアされたのちの話になるため、現時点では学校現場では進んでいないというのが現状である。平成29年度からの部活動指導員制度も安全面などのいくつかの課題もあり、制度化されて5年経過した今もなお現場に十分には浸透していない現状もある。

このようなことから、これまで指導者の熱意と献身的な取り組みに支えられてきた部活動は、今後もしばらくは兼職兼業の形で進んでいくものと推測する。部活動を指導したいという強い希望、言い換えれば、それが夢だったから教員になったという先生方もいる。一方で、働き方改革において「必ずしも教師が担う必要のない業務」に分類された部活動は担わないと選択する先生方も増えてくるであろう。部活動を「希望する」「希望しない」が、教員の熱意のバロメーターなどといったハラスメント的な問題や、職員間に不協和音を引き起こす懸念もあるので、学校全体として今後の部活動の方向性を確認し、共通理解する作業が必要であると考えます。

これらのことから、本校の部活動を今後持続可能なものにするという視点においても、指導者という人材確保の課題は大切な課題であると考えます。教職員は定期人事異動が避けられないため、1つの方法としては、やはり結果を求められる部活動を明確に打ち出して、玉龍高校の看板部として位置づける必要があると考えます。外部指導者として人材を確保する場合は、指導費という予算面の確保と、予算がともなうだけの指導時間の確保といった課題がある。今後、地域へ移行する流れがどのように行われていくかによって、新たな課題もいくらか生じるであろう。また、生徒のニーズに幅広く対応することを求めると、部員数の確保に課題が生じる。今後、少子化の影響を含め部活動を再編する必要がある場合は、NPO法人や民間企業の活動に生徒個人が習い事のひとつとして加入するという選択肢もある。現存の部活動設置数は、平成3年30学級から平成20年18学級になるまでに、文化部は6減少、運動部は4減少(山岳・体操・柔道・空手)の経緯があり少人数の部活が廃部になった。現在までに部員数が少なくなっている部も多い。部員数を含めた部員の確保という課題がより一層深刻な状況になってきている。

6 部員の確保

2020.12.9付南日本新聞記事によると、ラグビー花園予選に参加する20校のうち、単独チームが組めるのはわずか8校で、花園4度出場の古豪甲南も大規模校ながら、今では合同チームで参加している。41年ぶりに花園出場を決めた平成18年に甲南に勤務していた私は、県立鴨池陸上競技場でラグビーの決勝戦を応援していた。相手は鹿児島玉龍。最後の最後まで、どちらが花園出場なるかわからない好ゲーム。

玉龍のキックがボールのサイドへ外れノーサイド。19-18というドラマのような結末だった。教員人生で初めて大阪花園ラグビー場まで応援に行った。ついこの前だったように感じる。翌平成19年は、鹿児島玉龍が甲南を下し3年ぶり7回目の花園出場を果たした。この15年でいったい何がどう変わったのだろうか。ワールドカップ効果でジュニア世代が増え、レベルアップしたが、半数が県外へ進学するという。約110人が所属する鹿児島ジュニアクラブの監督は「高校の受け皿がネックだ。」とコメントをしていた。15人制という競技特性上、少子化の影響を受けやすい。県内公立普通科高校において単独チームで出場できるのは、今は大島高校と玉龍高校の2校となっている。県内・市内の大規模校ですら部員不足という現状にある。私立志向の中学生も増加している。“運動部に興味のある生徒が少なくなっている印象”という県内指導者のコメントにも共感する。ラグビーをはじめスポーツに関わるジュニア世代が鹿児島玉龍を選択するための方策を探す必要がある。全種目の県外流出も課題である。

また、最も喫緊の課題は、中学生の私立志向の増加に対して、どのようなアプローチをしていくかであろう。

右表の通り、平成21年度～令和3年度までに、3087人生徒数が減少している。内訳は、県内公立が4736人減少したのに対して、私立・高専等は1520人増加している。高校無償化が開始した平成22年度の私立志向は顕著である。

令和2年4月からは私立高校授業料実質無償化がスタートし、より公立離れが数字にはっきりと表れている。今年の受験生である令和3年度卒業予定者数は6年ぶりに増加に転じたというニュースに期待するも、県内公立の希望者数は-163人と公立にとっては厳しい状況が続いている。多様な学科・コースを設置する私立高校は、生徒のニーズに幅広く対応が可能である。大学進学を主な



県内公立及び国立の中学校卒業予定者の進路希望状況(7月10日基準)
鹿児島県教育委員会HPより

表 3

	前年度比(実数)					
	卒業予定者	高校進学	県内公立	私立・高専等	普通科	
平成21年度	17793	230	223	138	85	84
平成22年度	16514	-1279	-1263	-1408	145	-532
平成23年度	16400	-114	-65	-318	253	-325
平成24年度	16120	-280	-376	-323	-53	-258
平成25年度	15794	-326	-282	-345	63	-266
平成26年度	15303	-491	-485	-381	-104	-155
平成27年度	15580	277	274	58	216	116
平成28年度	15314	-266	-275	-289	14	-95
平成29年度	14980	-334	-355	-430	75	-344
平成30年度	14803	-177	-201	-333	132	-33
令和元年度	14533	-270	-267	-311	44	-329
令和2年度	14168	-365	-365	-631	266	-244
令和3年度	14476	308	221	-163	384	-54
		-3087	-2249	-4736	1520	-2435

る。短期間にこれらの改革を進めることは容易ではないであろう。しかし、魅力ある学校づくり、他の普通科高校との差別化に着手し、玉龍高校の魅力とは何か、付加価値を何にするのか明確に示していく作業を進めていく時期がきているのではないかと考える。

8 玉龍高校の魅力とは

例年、夏期休業中に実施する中学生 1 日体験入学で、部活動体験を行っている。しかし、ここ 2 年間はコロナ禍のため、部活動は見学のみで部活動体験が実施できなかった。中学生の率直な意見をキャッチするために、今年度は感想文の記入用紙に、「玉龍高校の一番の魅力を教えてください」と自由記述の質問項目を追加した。自由記述を①～⑧におおまかに分類して集計した結果は下の表 4 のとおりである。

表 4 令和 3 年度中学生 1 日体験入学アンケートより

Q. 玉龍高校の一番の魅力を教えてください		R3. 7. 30
		回答数 194名 %
① 文武両道・部活も勉強も頑張れる学校		89 46
② 部活動の活躍		45 23
③ 進学実績・学ぶ環境		17 9
④ 明るく楽しい学校(雰囲気・生徒・先生・先輩OBの影響)		14 7
⑤ 施設・設備		12 6
⑥ 中高一貫		8 4
⑦ 学校行事等		6 3
⑧ その他 (学校名・中間服・無回答)		3 2
		194 100

①文武両道・部活も勉強も頑張れる学校と②部活動の活躍が魅力と答えた生徒が全体の 69%を占めた。学校パンフレットのキャッチフレーズである「玉龍と言えば部活でしょ!」のとおり、中学生にも部活動が盛んなイメージが根付いているようだ。②部活動の活躍に分類された記述の中で特に目立ったのは、野球部に関する記述が 10 名だった。令和 2 年夏の県大会ベスト 4 の効果と考える。伝統的に強いラグビー部 4 名、県大会上位のバレーボール部 3 名、他これまで全国大会・九州大会に出場した弓道部・放送部・剣道部・合唱部・美術部・将棋同好会等具体的部活動名を書いた生徒が 29 名いた。最も興味深かったのは、「文武両道を高いレベルで行うことができるのは玉龍しかない」、「鹿児島県の公立高校で甲子園を目指すなら玉龍しかない」という記述があった。本校が求めるモノ＝本質そのものであると再確認した。昨年度から、数回実施している部顧問会議においても、今後、文武両道を掲げる玉龍高校はどうあるべきかの議論を長期的なスパンで検討し、深い議論を重ねていく必要性を確認したところで



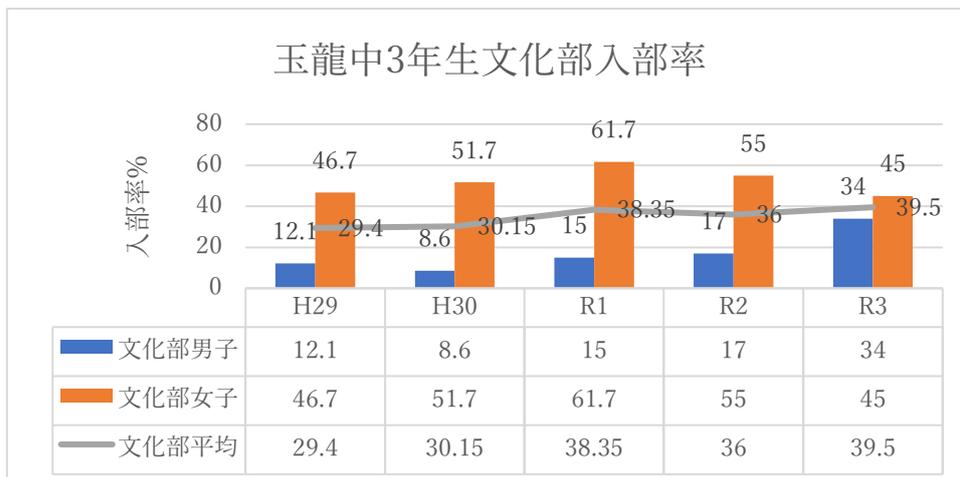
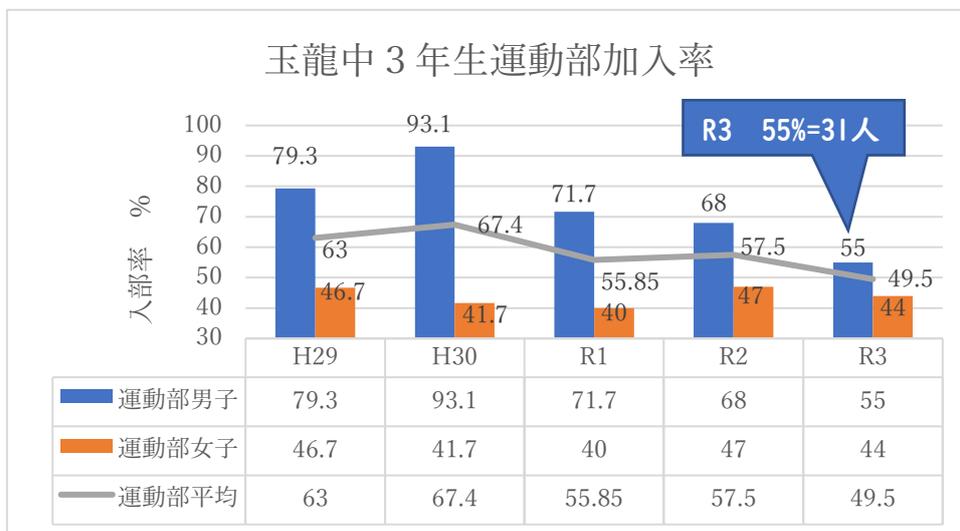
ある。私たち教職員もそれぞれの立場、役割、期待されるものが異なることを踏まえたい。お互いの考え・意見を理解し、共に支え合う体制づくり＝協働性を高める機会となれば、より理想的であり効果的である。

南日本新聞記事で読んだ名古屋大教授隠岐さや香氏の話で、「日本人は自分たちが作ったシステムを変えられずに、今まで通りにやろうとしすぎて自滅する傾向がある」、「われわれは、われわれのために、これまでの社会を変えなければならない。そのとき賢い人が課題を解決してくれるはずだという考えは、捨てなければならないし、お互いに主張し合わなければいいアイデアも出ない。」という文章に共感した。まさに学校という社会にあてはまる。

9 付加価値としての部活動

本校は強化指定部をもたない。部活動は学校にとっては大きな宣伝効果となる。前述した近隣の4校を含め、個人競技・ラケット種目・文化部においては、九州大会・インターハイや全国大会に個人で出場を果たしている学校は多数ある。それは、推薦入試等で中学時に競技成績の高い生徒が入学するという条件1つで上位大会出場の可能性はかなり高まる。因果関係からすると必然の事であろう。実際に、大学進学第一の進学校において、短時間練習でも九州大会・全国大会出場を果たしているとなれば、個人競技・ラケット種目・文化部の実力者はその進学校へ推薦入学を希望するであろうことは容易に想像できる。しかし、団体種目となると、上位大会を目指すには、部員確保や練習時間確保等の条件も加わるため、個人出場よりもかなりその可能性が低くなる。団体種目においては、更に持続的に毎年一定数の部員の確保と対戦相手に左右される中でも競技成績を収めなければならないという条件が加わる。そんな中、今も玉龍高校は、中学生のアンケートにもあるように、公立高校の中では、ラグビー・野球・男子バレーボールという団体種目は県大会上位の成績を収めている。これまでの歴史や伝統からも期待は大きく、学校内外から常に結果を求められる部活動でもある。近隣校との差別化を考えると、やはりこの強みを生徒募集のためのアピールポイントにして、大学進学も部活動も存分にできる環境を整えていくべきではないかと考える。逆に、ここを強化する対策をしていかなければ、今後も加速する少子化や私立指向のあおりを受けてしまい、現状を維持することすら難しくなるだろうと考える。大学進学を目指す、鶴丸・甲南・鹿児島中央を希望する中学生たちの中から、玉龍で「ラグビーがしたい!」「野球がしたい!」「バレーボールがしたい!」と全国を目指すという明確な目的意識と学力向上意欲を持つ生徒たちの夢が実現する学校という玉龍のブランド化が構築できたら、レベルアップを図ることもでき、学校全体の活性化にも繋がる。団体種目が勝ち進むと、個人競技等では実施されることがない全校応援が可能になる。学校行事の玉中戦とはひと味違うこの全校応援を体験することは一生の思い出であり、チーム玉龍としての所属感を高め、更に一体感・共同体の意識が深まる効果が期待できる。

10 玉龍中学3年生の入部率推移と昨今の子どもの体力低下について



参考データ
H29
R2
R3
入部調査より

公益財団法人日本中学校体育連盟によれば、運動部に所属している中学生は全生徒の約60%となっており、所属生徒数や所属割合は年々減少傾向にある。玉龍中の運動部入部率も年々減少傾向にあり、R1には全国平均60%を下回っている。特に男子の運動部入部率の減少は顕著であり、R3の中学3年生は55%と過去5年間では最低の数値となった。ちなみに文化部をみると、文化部の入部率は年々増加傾向にあることがわかった。R4以降の状況を現中学2年生、中学1年生男子の運動部入部率で見ると、ともに67%とR2並みだった。

近年子どもたちの体力に関する諸課題となっている、「運動する子としない子の二極化」、「小学生・中学生男子のスクリーンタイムの増加」、「男子の肥満傾向・女子の痩身傾向」、「中学女子の一週間総運動時間60分未満が20%」、「体力の低下傾向(特に小5男子が顕著)」の5つの項目について、玉龍中の運動部入部率減少傾向を見ると今後着手すべき大きな課題のひとつと考える。スポーツ庁が公表した2021年度「全国体力・運動能力、

運動習慣等調査」結果が、小5男子・小5女子・中2男子の体力合計点の全国平均が調査開始以降最低を更新した。更に、肥満の割合は、小5男子 13.1%(2.0ポイント増)、小5女子 8.8%(0.7ポイント増)・中2男子 10.0%(1.4ポイント増)、中2女子 7.1%(0.5ポイント増)増えた。小5男子・小5女子・中2男子は過去最高だ。新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、令和元年度末から児童生徒を取り巻く環境が一変した結果、全国的に児童生徒の体力レベルの低下傾向が進む状況が明らかになった。特に小5男子の変化が顕著で、R1以前からも新体力テストの全国平均はここ数年過去最低を更新している。スクリーンタイムの増加と運動に親しむ子どもの数の減少は、コロナ禍のステイホームやおうち時間の増加により一層拍車がかかり、体力低下と肥満傾向を加速させている。本校の状況も今後注視していく必要がある。

11 まとめ

この5年間校務の一端として携わった部活動について、保健体育科教諭としての立場から現状や課題について個人的な見解を述べてきた。実際の学校現場は、日々対応を迫られる新たなタスクが持続的に生じる。この5年の間にも、高大接続改革・大学入試共通テストへの対応、新学習指導要領への対応、アクティブラーニングの推進やICT活用、GIGAスクール構想への対応など、次々に行わなければならないタスクに迫られている。そのための職員研修や会議も多い。平常の教育活動と平行してこれらのタスクに対応しなければならぬというえ、この2年はコロナ対策が加わり、PDCAサイクルでいうとPとDに多くの時間を費やしている。業務の多くは、コロナ対策をひと手間加えたり、実施形態を変更したりと作業が増えた。最も優先順位が高いのは目の前にいる生徒達の教育活動であり、PDCAサイクルのCとAについては、紙面上の結果や反省、課題という文章・文字で終わってしまう傾向にある。もともと時間的余裕がないのが今の学校の現状といえよう。おそらく前年踏襲で学校は回っていくが、何も手を加えないと学校は衰退していく。より良くするための学校改革を進める道筋として、まずは問題意識の共有からであろうと考える。今回の研究紀要の内容も、玉龍のミッション探索の必要性を認識するきっかけ、材料の1つになればと思っている。

業務改善が進む中ではタイムマネジメントがより重要となる。学校改革のための職員研修と会議の時間枠を確保し、PDCAサイクルのCとAをしっかり機能させて、玉龍の未来会議を重ねて玉龍のミッション探索を行い、改革のスケジュール案を立てる。もっと広い視野で学校改革を進めるならば、令和4年度から高校普通科改革で普通科に新しい学科を設置できるようになることや保護者や地域との連携を取り入れた体制づくりなども加味すべき事項となるであろう。ベネッセのVEWnext2021.6の特集にあった香川県立高松北中学校・高校の取組などは、中高一貫教育校の本校も参考になる。何をどこまで進めるのか、優先順位をつけながら焦点化して作りあげる作業は一大プロジェクトになりそうだ。

本校は文武両道を掲げる中高一貫教育校である。部活動という視点で私が考える玉龍のミッションは、全国で活躍する熊本県立大津高校サッカー部や広島県立世羅高校駅伝部などを目指すものとは異なる。本校のこれまでの伝統を継承し、近隣校との差別化を加味した部活動のブランド化である。部活動は勝利至上主義であってはならないが、スポーツは勝つか負けるかの側面がある。結果を求められる部活動に入部する生徒は覚悟を決めて入部し、保護者の理解も得ながら活動することで教育効果をあげていく。結果的に全国に玉龍の名を知らしめることができれば最高である。

結果的にというのではインパクトが弱いとの指摘があるかもしれないが、文武両道にこだわる以上は部活動優先に偏ることは本意ではない。これまでも本校の合唱部や野球部から東京大学に進学したり、美術部・吹奏楽部から東京藝術大学に進学したり、男子バレーボール部・野球部・ラグビー部等から筑波大学に、その他多くの部活動生たちがお茶の水女子大・早稲田大・慶応大・大阪大・神戸大など難関といわれる大学へ進学した。高い学力をもって志望校合格を勝ち取った卒業生たちが沢山いる。これまでの多くの部活動生達が体現してくれたように、高い目標を掲げて本気で部活動に取り組める環境づくりと、志望大学の合格も学力で勝ち取ることができる部活動生達の育成が玉龍のミッションであると考えている。私案を右の表6にまとめた。

表 6

<p>玉龍高校のミッションとしての部活動 (私案)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①ブランド化(全国目指す部活動の明示・重点化) ②部活動の位置づけ(学校グランドデザインに明記) ③部員確保に繋がる生徒募集 推薦入試枠の拡大(240名定員の10%)・中学校入試への反映 普通科高校改革も視野に入れて ④環境整備(活動場所・指導者・部員・活動時間・遠征を含む活動費) ⑤勉強との両立に励む部活動生徒の育成(志望大学合格を勝ち取る学力)
<p>保健体育科としてのミッション</p> <ul style="list-style-type: none"> ①運動部入部率のアップ(中学校・高校) ②学校全体で取り組む体力向上(体力は生きる力)
<p>魅力ある学校づくり・特色化としてのミッション</p> <ul style="list-style-type: none"> ①高校普通科改革の活用(カリキュラムマネジメント・新学科の導入など) ②地域・保護者の期待に応える学校

12 おわりに

令和3年秋の新人大会で大島高校野球部が県大会で優勝し、九州大会準優勝という偉業を成し遂げ、春の全国選抜大会甲子園出場が決定した。21世紀枠で出場した春の全国選抜大会甲子園から8年。島から甲子園なんて夢のまた夢と思っていたことを現実のものに変えた生徒達がいる。中学時代に離島甲子園で全国準優勝を果たした生徒達は、大島高校で野球をする道を選んだ。大島高校野球部はここ数年ベスト8入りをずっと果たしていた。いくつもの欠かせない貴重な勝因が重なった結果であると思う。県内公立高校は大島高校野球部から沢山の刺激と勇気をもたらした。可能性への挑戦を続けた先に不可能はないと信じていたい。

<参考文献・引用など>

- 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインについて 平成30年3月スポーツ庁
文化部活動の在り方に関する総合的なガイドラインについて 平成30年12月文化庁
鹿児島県部活動の在り方に関する方針
鹿児島市教育委員会 学校の部活動等の方針
全国高体連ジャーナル 2018 Vol. 35 スポーツ庁政策課 教科調査官 高橋 修一
文部科学省だより 運動部活動のあり方に関する総合的なガイドラインについて
全国高体連ジャーナル 2018 Vol. 36 スポーツ庁政策課 教科調査官 高橋 修一
文部科学省だより 「部活動サミット2018」レポート
全国高体連ジャーナル 2019 Vol. 38 スポーツ庁政策課 教科調査官 関 伸夫
文部科学省だより 短時間で効果的な練習で全国大会に出場した部活動の紹介
全国高体連ジャーナル 2020 Vol. 39 東京都高等学校体育連盟研究部
研究大会課題研究 運動部活動が育むものとは何か～部活動の存在意義についての東京都の調査研究～
研究大会第3分科会 部活動の活性化～魅力ある部活動とは
文部科学省だより 学校が主導する部活動改革 スポーツ庁政策課 教科調査官 関 伸夫
全国高体連ジャーナル 2020 Vol. 40 スポーツ庁政策課 教科調査官 関 伸夫
文部科学省だより 学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について
全国高体連ジャーナル 2021 Vol. 40 福岡県立久留米高等学校教諭 江崎 健史
研究大会第1分科会 競技力の向上 休日設定に関する運動部活動の在り方と競技成績への影響
いろいろだより 事務局通信 専務理事 奈良 隆
鹿児島県高体連年報
鹿児島玉龍高等学校 学校要覧及び学校案内パンフレット・学校だより・創立80周年記念新聞
南日本新聞記事
VIEW next 高校版 2021.6 B e n e s s e
特集 生徒が輝く学校づくりー高校の特色化・魅力化ー 香川県立高松北中学校・高校
平成22年度3月25日鹿児島県公立高校再編等検討委員会
今後の生徒減少に対応した公立高校の在り方について(答申)
高校教育改革について 文部科学省HP